



後西遊記國字評

4管1  
600  
99



門 曾 4  
冊 600  
卷 99

特

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

龍澤文庫



此書の趣向と考らば玄奘師西天より真經ととり來ると雖も  
真解の記がゆへに二百年の後僧徒謬と以て謬と傳へ邪路の人と

梅檀切徳佛

導に釋尊は慈悲却つて無慈悲とあるとありま玄奘師再び真解とせよ  
出さんるを佛祖に請めて其人を以て唐半偈とて西天に往て真解と求めしを  
ゆが主意あり今世間にも一人の商あらん小この家業と起し生渥大富有と  
あるん小の其業と金錢斗を殘して家と起せ辛苦艱難と説きこころ家と  
治むべき家法と遺さざれば必其子驕奢恣逸ゆて其家と破り業と失ふに至る  
遺せし家資金錢は子孫と驕後小道楷梯とある是真經あつて真解とせよ  
世人と悟むの第一の教戒あり又一体の体裁は前西遊の真經に似此後西遊の



真解の位と分別して着ざれば好反頌ちがう。是此書をよみぬ第一義ありと  
 ありんば石猴の遺種再び花果山に生ずるや悠々自適して悠々  
 念なく日々遊戯して居る所忽ち老猴の死と見て驚き夫より通臂  
 仙と脩仙の道と問ふ趣向大きふりしは皆自然ふして一も二理あり  
 ぞ前西遊開戦勝佛孫大聖自ら無常迅速と観じて他邦ふ至り脩仙乃  
 道と問ふをあるは小行者老猴の死に驚きて初て脩仙のふと聞ふ作  
 相返對して且しく且大聖小聖の智覺一等おとせし所全偏ふりし  
 所ゆへ大き小宜し通臂仙の小行者小言る句々皆因有理有つて  
 ちあり且言る話の内は最初大聖のいづ方へかちて仙術とゆふりと

いふ所大なり。茲めて大聖の何方へ行て何仙ふ何の術と授りしと  
 云ふて何の意味もあり。通臂仙も大聖の最初いづりて脩仙のゆふり  
 と云ふる知らぬて愈しちしそめて脩仙の道ありきまより後洞山とよ  
 小行者と伴なるの金箍棒と云ゆりしは小行者は棒と見て  
 動りし難きゆふりな残りし道と思ふ心と記さるる大より大聖のは棒と  
 成佛の後遺しありて禪山の寶とくくし條々皆縁と引如く條理  
 りく分けて面白し小行者の脩仙の道と尋て最初小北拒盧洲は  
 至りば地極寒石毛の土足る小石足故又西牛賀洲水至る是常人の業と  
 雲の術と云ふ一朝一夕の事小非を巨多の人かと盡し幾個の歲月

と費さざれば業ととけがき所と暗論せりあんな青龍山の白虎洞  
中糸同觀の悟真祖師と云く尋行て入りしに道士濫小真大小  
して初て入門の徒ふ不見只定心養氣と以て人と束縛せ豈知んや  
そのふ者の心真實の智識あるとき定心養氣の要自治一究ておの  
づから驅龍駕虎の術師傳と待ぢて悟るは入り入りべし今世に  
師と稱する者青龍とのひ白龍と唱へ糸同悟真と自称して俗とぞと  
そのふ驅龍駕虎の名と以てを實ふりて術とあり治るも覺束あ却て山下の末葉  
自治の者あり治るも皆心術たりしりて驅龍駕虎の術は治るも  
工夫ありしりざればあり制や其師たる者表ふ道德篤行の假と示

して裡へ入つて一碗の人參肉桂湯と喫して好産嬰兒と欲せ  
且同門妬忌の人あり是等の者其門下小出藍の才あるを  
いりて知り治ん道と云ふ者のよくあべき教戒を四方小漫遊  
して空しく歲月と費さんり已が方寸の地位小道と求るふあざる  
也一を漏洞裏小ゆつて道と自己の身小求む胸中自づから  
一個の孫大聖在つて仙機秘旨超凡入聖と云は此の趣向最  
妙とのふべし  
但し定心養氣の術の如き修して治て仙とありし人へか  
ふ有るもこれども小行者よおしては是と云く用ひて超凡  
の機とゆかり彼其人の不龜の藥のどく小術と大さ小用やれば大用とあり  
大術もかり小用れは其用とあらず是等の念と暗小含みしりあらん  
小行者仙機と自治して後龍と伏し虎と降せ先最初は件を

き時ハ起凡の力入で依つて其まゝと見せしめん小行者地獄小  
行き鬼判と評定せしめられて小行者の知勇両全の一所と云ふものと  
大いなる一且大聖ハ地獄小行て簿と塗抹せしめんと見せしめると  
行あつた小行者ハ智と以て十王と壓伏せしめんと反對又大い  
開卷の聲ハ 未了先天又後天 東生西没逝長川  
誰人不具真元性 幾個如來幾個仙

此詩一編の意と總括して大いなる一最此一二の巻の中其ハ  
小行者地獄めて鬼の公案と判つを第一の趣向と云ふ也一  
叔小行者起凡ハ聖の地位小至つてハ慾念煩悩ハある處と云ふ

るあれども其眷族の衆猴の仙酒仙桃仙丹などを欲して是と  
ゆんるとそのかゝるれば遂小玉母の仙臺と根藉と云ふ至る是  
今世の士大夫とる者慾なく私をキ人も其妻子親族の爲小或ハ私  
慾とあり又ハ依怙具負の誹と受るも皆眷族の爲小と云ふと  
かのき故之戒ざる處と云ふ小行者の幡桃園小至る三千餘株皆枯て  
一花一葉も石見一所の趣向新奇小て妙く云ふも三千年小一熟  
其る也小一花一葉のといふを理かゝ大聖の大キ桃の實と喰  
ひ一を反對して云ふ一盤晒乾的仙桃と西王母ハ行者小  
其ハ所仙桃の干物は是と諸書ハいふと云ふて奇妙云は件ハ云ふ

小行者ハ起九入聖の者あり夫々心懐をこり小狂ふときハ飲食の爲小上と  
志の凡狼藉又酔小あて董双成娘子の唱と金み許花瓊娘子の曲と聽ん  
ると請ふ酔興の風顛凡俗の者此戒とあるべし天帝の衆神とて小行者と  
征はる小行者ハ素より銀丸の者五行の套と起出ず者也敢て礙る處あり征服  
せらる難し茲少て観音或ハ佛祖と出さば大聖とて小行者と伏せしむる所  
前記と反對せり且今と小行者の指ハ大聖の金箍棒ハ大聖の耳中小行者  
納光金箍兒と以て不意小石猴の既み加る前記と趣と入りて大なり  
小行者固有の耳中の金箍棒と云出之意味深くして大なり  
叔旃檀功德佛の再び唐土へ出る所頑石再ハ靈根と生じて石

猴と産せらる事ありハ仏經の沉淪あるんれと眞經度世の消息と探  
る爲小唐へ往くと前記ハ佛祖度世の爲小觀音と唐へ渡せとお似て  
居れども仏祖度世が主ありて其度世の爲小つらう主中の補佐ハ  
玄奘師是も原ハ金蟬長老の再誕言りて釈尊の一体分身の如く  
主小ね遠かり孫悟空以下猪八戒沙和尚ハ客中の主あり其餘の  
太宗より外都の魔王妖邪の類ハ皆客なり此後記小説ハ今  
此石猿再産小よりて端と突き唐半偈の眞解来る主あり早眞此意の惣括  
眞經と出して度せると又度せしたが言とありて眞解と来ると主客の位置  
前後と相對せし所事々物皆前記と放れて合ハ合ひて放る所實妙と云ふ

玄奘の唐小至る佛祖の木棒と授與する最り一妖魔鬼邪鬼の  
類の金花杵棒九鉞釘も征むべしれども彼野狐禪の如きい素り  
人あれば濫り小殺むべし又捨置け人を邪路小守く依つて木棒  
の喝三の法畱小勝る類向あり一叔唐小至りて佛法の莊嚴繁  
昌十二分の華靡奢靡といひて却て佛法の衰微ありと説く皆く  
人言の外小出つ法門寺の生有和尚の如き玄奘小對して佛骨の虚  
と説て今世上識なき人真非と知りて画龍と飲ふの如  
きの佛芥小多て祀死するもの能く此件（けり）の妙佛法の真と説て  
却て仍の佛骨と云出（し）其佛骨を授りて韓退之と牽出（し）太公に佛法と

誹議せし韓退之と楔りて真正の大顛唐半偈僧と牽出（し）  
天序次ありてを理ありて其佛と非ざる韓退之も佛祖の意も又  
玄奘師の意も大顛の心も道異あれども世と度し民と安んじら  
所ハ儒佛二途小落る趣向妙く世の至智識者ハ大顛より定り  
大定よりつて顛とす大顛の名義大より大顛の英主小をふりて  
用らるる所ありき小姑忌の生有法師あり加ら小慧眼聰耳廣  
舌の三個ありて主の視聽とくくを足るべし少人の慧と聰と  
廣とす。所ハ皆奸と助け邪と補ふなり世人の盛とる公道の  
繁華ハ仏芥の目山の衰とる。向背の理とすけ前記ハ佛法と正



とて魔と邪とすと茲の佛法の中にも奢侈と魔邪とと清淨とと  
大より一叔又玄奘の原と佛祖の弟子たる金蟬長老あれども所<sub>り</sub>有<sub>り</sub>に  
らて塵世小出<sub>り</sub>眞經と東土渡<sub>り</sub>功業とらて佛位小復<sub>り</sub>此根里有<sub>り</sub>  
因縁あり又大顛の<sub>り</sub>と是と異<sub>り</sub>て本書の中にも如く根器も<sub>り</sub>因縁  
あり者とのへとも因果と積<sub>り</sub>一念と融<sub>り</sub>時<sub>り</sub>佛共<sub>り</sub>も出<sub>り</sub>べ<sub>り</sub>とのふ<sub>り</sub>反對<sub>り</sub>  
玄奘師孫悟空の經と封<sub>り</sub>大顛僧小金箍呪と授<sub>り</sub>は<sub>り</sub>つ<sub>り</sub>も<sub>り</sub>む<sub>り</sub>て  
最<sub>り</sub>く<sub>り</sub>小行者の呪<sub>り</sub>らて師と尋<sub>り</sub>來<sub>り</sub>る<sub>り</sub>大<sub>り</sub>く<sub>り</sub>小行者の龍王宮より龍馬と借<sub>り</sub>  
所以前孽龍あり<sub>り</sub>人<sub>り</sub>と<sub>り</sub>た<sub>り</sub>れ<sub>り</sub>る<sub>り</sub>龍子龍孫の徒<sub>り</sub>とのふ<sub>り</sub>も<sub>り</sub>人<sub>り</sub>小役<sub>り</sub>せ  
られ荷と駭<sub>り</sub>る<sub>り</sub>る<sub>り</sub>美<sub>り</sub>知<sub>り</sub>せ<sub>り</sub>た<sub>り</sub>のふ<sub>り</sub>と<sub>り</sub>ら<sub>り</sub>と<sub>り</sub>彼<sub>り</sub>牛<sub>り</sub>後<sub>り</sub>鷄<sub>り</sub>口<sub>り</sub>の<sub>り</sub>比<sub>り</sub>喻<sub>り</sub>の<sub>り</sub>如<sub>り</sub>

然<sub>り</sub>と<sub>り</sub>河圖の馬と出<sub>り</sub>一周の昭王の馬具と出<sub>り</sub>す<sub>り</sub>く<sub>り</sub>按<sub>り</sub>く<sub>り</sub>是<sub>り</sub>は<sub>り</sub>皆<sub>り</sub>  
此後の文筆厭<sub>り</sub>入<sub>り</sub>く<sub>り</sub>の麒麟と<sub>り</sub>ね<sub>り</sub>照<sub>り</sub>意<sub>り</sub>史記左傳の<sub>り</sub>越<sub>り</sub>と<sub>り</sub>以<sub>り</sub>て  
双方<sub>り</sub>う<sub>り</sub>合<sub>り</sub>せ<sub>り</sub>る<sub>り</sub>且<sub>り</sub>儒の道<sub>り</sub>ある<sub>り</sub>河圖の馬も<sub>り</sub>能<sub>り</sub>く<sub>り</sub>用<sub>り</sub>ゆ<sub>り</sub>れ<sub>り</sub>は<sub>り</sub>佛法の助<sub>り</sub>と  
あり孔文子の麒麟も<sub>り</sub>思<sub>り</sub>く<sub>り</sub>用<sub>り</sub>れ<sub>り</sub>は<sub>り</sub>佛法の障<sub>り</sub>礙<sub>り</sub>と<sub>り</sub>なる<sub>り</sub>つ<sub>り</sub>る<sub>り</sub>所<sub>り</sub>は<sub>り</sub>佛  
儒一途小歸<sub>り</sub>る<sub>り</sub>所<sub>り</sub>と<sub>り</sub>く<sub>り</sub>綴<sub>り</sub>る<sub>り</sub>あり<sub>り</sub>此三四の卷<sub>り</sub>めて<sub>り</sub>韓退之<sub>り</sub>佛骨の  
表<sub>り</sub>より<sub>り</sub>大顛<sub>り</sub>と<sub>り</sub>同<sub>り</sub>言<sub>り</sub>の<sub>り</sub>件<sub>り</sub>と<sub>り</sub>眼<sub>り</sub>目<sub>り</sub>と<sub>り</sub>あ<sub>り</sub>る<sub>り</sub>魚<sub>り</sub>と<sub>り</sub>え<sub>り</sub>  
天花寺小至<sub>り</sub>る<sub>り</sub>件<sub>り</sub>點<sub>り</sub>石<sub>り</sub>和尚の徒<sub>り</sub>弟<sub>り</sub>定<sub>り</sub>靜<sub>り</sub>慧<sub>り</sub>の<sub>り</sub>三<sub>り</sub>字<sub>り</sub>と<sub>り</sub>用<sub>り</sub>ひ<sub>り</sub>て<sub>り</sub>各<sub>り</sub>を<sub>り</sub>  
寺<sub>り</sub>歸<sub>り</sub>を<sub>り</sub>天花<sub>り</sub>と<sub>り</sub>僧<sub>り</sub>と<sub>り</sub>點<sub>り</sub>石<sub>り</sub>と<sub>り</sub>定<sub>り</sub>と<sub>り</sub>靜<sub>り</sub>慧<sub>り</sub>と<sub>り</sub>是<sub>り</sub>皆<sub>り</sub>世<sub>り</sub>俗<sub>り</sub>の<sub>り</sub>見<sub>り</sub>と  
以<sub>り</sub>て<sub>り</sub>各<sub>り</sub>付<sub>り</sub>る<sub>り</sub>の<sub>り</sub>木<sub>り</sub>棒<sub>り</sub>と<sub>り</sub>衆<sub>り</sub>僧<sub>り</sub>と<sub>り</sub>驚<sub>り</sub>と<sub>り</sub>新<sub>り</sub>奇<sub>り</sub>大<sub>り</sub>續<sub>り</sub>西<sub>り</sub>遊<sub>り</sub>

の念珠木柳と以て兵器と化し又百般の品も化しくるもの見れば木棒と  
木棒みて用ひし最ふろしんぐべし凡僧の木棒の靈異と見ても  
いふと悟くは妖魔の神通あれば木棒も恐るん事を疑ふ小行者の  
金箍棒と見せるふらんで實小威服なり是威愛兼ひ行ひされ  
叶はざるを止めしんぐべしんぐりて妖ある點石と楔とて妖ありて  
正の猪戒と引出は猪悟能の胎と猪小受て産し又一戒の高  
翠蘭小胎と受て産せる照應して宜し孫悟空の成佛後鎮山の爲  
小金箍棒と殘し淨壇使者へ淨壇の受用あり故小九把釘と  
自利和尚小借去られし所夫々の牽性とまけて前記の意と貫ぬ

くせつ大いし一爰小又二の理あり猪悟能好むと不顧利害と非人  
の自利和尚小貸すも小我子といども取入はる能是其弟福山と  
いひ衆濟寺といふ名小たしめて却て其和尚の自利あるを知らざり  
今の世の僧徒も佛田と作る各有つて實あり實の布施とくくの田地と  
ある者多く且佛田堅厚惡草蔓延なれば妖と降し怪と伏せる九  
把釘なりて誠の佛田の墾田とくし此利害と多く者大力量の苦  
禪和尚なりざる老多ひゆんや但し其苦禪師も亦ゆんし故小屢  
請ふといども來らざるあり苦禪師の名有つて實は其人をくどし若  
實小有りとも來らざる其法は只苦禪師因墾の名と借つて自利とある

んとするが有りし行者猪一戒の苦禪と愛し鶉化道人と化して九鉈  
釘と偽て取返せ哄騙ふ近しとくとも正人君子の理をゆつて服定け  
れども自利の如き者の理義を説きごとく止むとゆずりて機変を  
用ゆるも亦權道あり又思ふも萬縁山衆濟寺の上不貼天下不着  
地の不義の富貴浮雲の如きとわらふも唐半偈既も小行者  
猪一戒二箇の徒弟とゆ金箍棒九鉈釘の利器木棒の利器あり馱  
はるも龍馬ありて道路平々坦々ありて心満ち意足るも安んじて  
天下那妖魔あるや邪心妄念自ら妖魔を生じらるも過きばと油  
の心を生じらると早害言下小起つて忽平地缺陷といふすべし真

正の師又神通の徒弟なりとも油断小らて缺陷のあひかり叔此葛藤の二  
村皆同姓のちて勝氏の葛家小嫁し葛姓の勝宗と娶りし葛延し子孫  
親しき族類あれども人多き時ハ自然と不肖の者も出来て貴賤貧富  
有るも勿論あり人々不満の心一ツの不満山と起し缺陷大王と生じ今日  
世上小多き事あり太白星の金氣とくつて缺陷と培ふ理最面白し  
是と小件かぎり小生有法師嬉怒富貴とゆつて大顛と誘へども心と動さば  
點石の華蕭奢後と示りせども大顛是と物とも思はば缺陷大王の種  
々の理と論これども大顛かぎりも屈せざ至大至正ゆつて定靜なるも通まり  
十五回假沙彌の唐半偈と流沙河小陥かぎりり最憎むべしといふもえ

沙和尚成佛の時今この功と思ひ九願の髑髏と何處に所置すべき  
事あり然ると破鞋と脱き捨てて不顧の人情と云ふべし依つて  
佛法小功ある髑髏も怒を生ずて却つて害となる所あるを教  
戒といふべし十六回沙致和の師の全身羅漢の像として水底と照らす前記の  
いふところ所新奇あり缺陷と塞ぐに金氣を以て大河と渡るに  
金氣を以ては土生金金生水相生の縁ととり又世の中金氣小非されば  
艱難も防ぎかきき比喩あるは十七回十八回解脱大王の半偈師とる  
一の三十六坑七十二塹の百八の數小合せしは勿論して凡俗の者  
此塹坑小落のうざる者なり既半偈師といふとも小行者の心様体

と放るれば妖邪の爲小惑はされて痴迷々々ある漸く小行者小の醒され有智覺小  
至る慎みと示すなり一十九回萬壽山五莊觀小至りて結元大仙の  
件一々前記の轍と久し趣向あり此処他所と同じく大仙  
あり道觀あれば歡んであり人夫果あどなりめりし物とある一  
つと引久て後天の強小倚て先天の妙と知らざる故仙道の妙と知ら  
ざるめんと云ふ是と半偈師土小斥せられ水小斥せらるるに火雲  
樓小栖しめられし五行を以て道行と切磋ほるるあり一觀  
音の甘露水と浴して三昧の火と滅する小至りて大仙是と怒りて却て  
其能と賞すし最大仙なる所以を大量の所見えてありし漸く結

と解て去小及んで猪一戒の人參果を奪む急卒の隙アヒタを性情と写し  
ゆてふるうが如く第二十回黒河を渡ふ半偈師一念の恚怒と起せぬち罵詈  
の氣息の黒風の波瀾を発して漂蕩し鬼国小至る前小八戒妖狐精  
と殺し爰小八妖狐精一戒と縛て前後應報相對してより二十一回  
黒孩兒の魔兵と統へ来る初巻の美色と以て半偈師と戲弄し  
次へ怪異と以て唬嚇ととりどる半偈師の心と動かしむるは是と琢  
磨の功と歷るがゆへあり此鬼国の黒昏々たる幸一獨り小行者と苦  
しまちむるのそあはれ妖狐精の狐媚大力魔王として怒らしめ又  
王の体面と顧みずして人よを奪と下し軟束せしむ王と自由小をふ

事堂中の物の如く爰小於て夫婦の道顛倒し理小昏き事  
実小黒眩の鬼國なり第二十二回絃歌村の件迂儒先生の議論  
是亦理小ちうし去れども皆さふ所眞の先王の道小あはれ小即面  
と虚飾して仁義と借つて名とする小さず依つて経と説き佛と奉じて  
華靡と表とする生有黔石の徒の佛道と道は返して心は同一哉よ  
詩小と尊儒々不尊一滅佛々不滅二  
到三底佛與儒四の五妙義不可説六  
二十三回玉架山の文明大王の文筆と以て人と壓せる加ふる小金錢  
と以て人とお泡を誰り是亦當つて倒れしむん黠吏の巧なき此二つ

よあり文明大王の最初小行者の筆力と歎賞せしる釋教嘗て人  
なきふあはばあは路頭と走り差へり會來つて他と教訓一文明  
の化小從者めんと云りあて他の妖邪の類の正にて仁慈もあり威武も  
ありて貫目と見せざる所大なり又烏雉と赤馬小用ひたるも面白  
小行者千萬斤の筆力有れども知りり讀書とせざるも又文筆  
に厭倒せられ半偈師ハカをせれども讀書の力あふりて文筆に厭  
倒せられざる故上小一個の金錠と加へて重くと増へたる最妙二十四回  
文明大王宮娥との論談大き小理有つて面白一真正の學士も孤寒  
の士ハ金錠と動りりゆととのふ最よく笑へり但一文明大王の

勇あり又あり術ありて仁智あるも然るも国帷の裏外人の笑ふを  
思ひて己の肺肝と吐てくるとに誰うあらん小行者の侯小定て其破綻と  
悟んといふて文明全たる者枕席のるも油断ありたるあり小行  
者文昌菩薩梓潼帝君小清めて魁星と降一春秋の筆と  
取て魁星の筆と持一像小託せ一と大軍一又魁星小何事  
も云せざるも大なり一は件ハ皆々新奇小て奇々妙々といふべ  
二十五回生香村の件妖塵射美婦と化して人とまどわたのこゝろに  
奇香と盡して人と銷魂させ又返魂させるといども其返魂は  
いくむくりはるは是小加ふるよ相錦綉帳と以てて誰ハ地位小至

さて迷はざらん去れども妖魔射師父の元陽と盗んと欲すれば其異  
香阿彌が為小温柔国の王脉香と要ん為小腕戸として投志りんと  
その恐あり彼黄雀蟬と秘りて後小彈丸の恐あが如し  
妖魔射の語中我美人局と以て你を騙せといふものも騙せ事  
あり却て你和尚局と以て先我が齋喫と騙せりといふ可矣  
よて能き笑話あり魔射怪の圈套謀りゆてりといふも人を騙せる  
心ある者いふ人小騙せられて小行者の毫毛分身の術小あざむかれり  
又此生香村と出て師徒温柔國へ至るならんと思ひしにうて  
温柔國の事あり依つて按ずるに温柔國より臘香と取りよ

来るありんと思ふを妖魔射の暗子鬼胎といふまゝに今常人の心を  
しくや智ある者已くや智小ありひて種々の煩惱とせよとてくいまこ  
えざる災とひりり引ゆ此誠小風説して温柔國より攻来るあり  
又四個の師徒へ温柔國小ねあづるありく且香味気色へ温柔  
にゆるおなれども僧徒へ温柔小近づくるおやへ此國とくさるる  
なりん凡二十六回惡山よ入るの件惡臭人と薰教と小至り且又  
十惡大王ありて十分凶惡のま腹あれども十惡十心して皆々已と  
利し人を害する惡意あるもへ及間の謀り毒惡互小ね殺  
小至りり小行者の反惡大王よ説く所惡と以て惡と勧うた

第二十七回上善國のてり妖狐の国母ととり隠しの前記の獅  
子が国王と井中へ陥せし反對をて事々物々反對しつてより国母  
國王仏小淫するが故に妖僧と引出し石測の從ふ過より九尾仙山  
子愛佛洞の松子とくふ殿上とて去去未來現在の三尊仏と安置し下面  
二十四個の和尚あり念經拜懺幢幡宝蓋香花燈燭鐘鼓音樂  
の和とら莊嚴微妙あり加ふる法座上の白く淨くの和尚容貌唐長  
老小彷彿する凡俗是とてんていごとく隨喜の信と起さるん此処を遠  
く所ハ只一心めて一心の定正なる時只昂ち唐老あり一心貪慾あれば

昂ち妖狐精なり今世上九尾仙山の和尚よびせしもの後まのん佛  
小淫する者のよき教戒といへし王母なる者既小其圈套小かり筆宛  
隠室小入れらる小及んで若小行者の穴窺ひする小あつされし誰れ妖  
狐の爲小汚穢せられざるを知りゆん人の妻婦寡婦の類人ある寺觀  
を詣りて隠室和尚と談ぶる人の議論とひらざるも不能は国母がよき  
よ本なりとへし二十八回陰陽山の件西行の路兒平也不平容易おも  
走り又去るも不成もわりのとりの最理あり世上の事一萬般皆志より人の  
和氣小合へば物々不平小怒氣小觸れし事々不平陰陽和合の所小非  
されは去るも不能論あり然れども陰自づから陰の理あり陽亦自然小



陽の理あり陰陽も不時あり夫と小行者二戒名力量を以て之程小  
陰陽融通すやめしふより二氣の激する小行者の咄口論出  
小仲人あつて双方と和解し和談せしめ論あり双方納泊ありと感と以て  
おどし理と以てを侍小おしめしめ和談すやめ却て利害と争ふと  
去れども両字と普通して平和の字とせよ萬世の利あるれども陰陽  
二王小於てハそ名一方小獨尊と事とをいふつきて有生て殺めくを用  
の物とありりと怒れどもを用ハ正小大用する所以と知らざる也之世る  
のありまきまき二十九回陰陽大王評議の件格別論せべき事  
あり小行者蒼蠅とあり蜈蚣黃蝴蝶と変化する前記小行者の所を以て

ありおねはたり陰大王の石匣小おく是も前記小ありおねはたり  
但し毛と以て寶劍小化し二王と驚馬と事ハ少く奇ありと  
いふべし爰ハ陰陽二氣といへども小行者の神通小行者の能く小行者小  
十分勝と付けて次の造化弄人の件ハ造化の妙用小行者よりとも  
圈とあるりありと説示せん為の仕込場あるれと思ひ弟三十回造化人  
と弄する件先第一造化山の各門最面白し造化小見小天公の陰陽二  
王と小行者の事を説く件ハ理あつておねはたり大いし小天公の小  
行者對論の所孔子と日と論する事ハ少く故事とを用ひて大い  
小天公の圈兒の許多ある誰れ此圈套と脱しゆん圈兒許多なれ

總て是一個とりもつて入りし小行者數個の圈兒と脱しゆられども  
好勝圈と騰り越るるいふ來りて好勝の害くる大なりといふべし李  
老君小撞見の所最笑ふべし是虚空雲中といふも油ひをればを  
虜の失のるるといふべし入りし小行者神通廣大を遠き量是と題て  
妖と降し怪と除き來れども未だ好勝の圈と跳脱せざり李老君小遇  
よ及んで筆を下し威をあらわして小天の小礼を心に生じ爰して好勝の  
圈と脱しゆり造化の人と度する功大ありといふべし第三十一回震  
村より皮囊山の件 三屍大王の賊も遇ふ件いふべし前記の照面  
ありてさして評せべきありし按ざる小の賊ハ七情の内のおつら各

易小去り安き也爰へあつて次小媼怒の不老婆々の件と此の  
張本ありんくと思ふべし三十二回大剝山不老婆々の件一把の玉火鉗  
女媼氏補天の爐火中小用る所とせし故事を用ひゆりし陰山洞裏小  
あつと修煉して取身着肉の至宝とありといふも能く入りて此一  
編の遊戯編めて女仙外史の柳烟兒水滸傳の潘金蓮密會の件  
などの取られども顛小是と言枕席上の顛鳳倒夢の場と鎗戟  
比較の語小くする巧とゆて妙々あり又戦書の文も大面白し古今の聖神  
此小生し此小死ざる者ありとせし妙論あり初め小沙致和猪一戒と戦ひ  
しめて大くの本事を現しし白玉火鉗の妙と不老婆々の事伝尋

常の敵小非ざるものと見せざるありん斯ありて小行者とおせば双方の出  
立と入りのていどあると看官も心もちせざる如くくらひ誠中作  
意の巧みと所々と思ひる三十三回小行者不老婆々比試の件々へ馬王  
の定海神珍鐵あると女媧の補天練成の物とお對しつる大ニう斯  
して見れば沙弥の宝杖一戒の鉈打の如き歌いゆぐるもむへ至剛の鉄棒  
と以て腕膚の玉鉏小當る所奇妙あり此比較の文句々皆奇絶よて  
前記小キ所大ニ面白し情絲と以て心猿と繫くを理ありと人  
ども心彼小滌ざれば情絲も留めぬず此回不老婆々の長老師弟と  
留む思意ある小あはれに害心なき者あれば小行者も是と殺さるる

便あり又其候ある時師弟小纏着して放れば是とたむらへ止まると  
ゆき小あつち老婆々も其匹偶と失して山崖小觸死をを後へ  
玉火鉏と碎碎小及んで山中の老く小を數の女子片々と拾ひて逃み  
四散する天下後世災言と遺すとつふ趣向最り第三十四回  
天地自然の孽海是非冤業の波濤と起して世人と沉淪する  
幸小佛祖の慈悲ありて恒河砂と以て孽海と埋む是れ一害  
を除きし又其沙中諤つて許多の雜種と填め入れて一つの展虫とある  
世上の事左小一害と除けば右小一害と生ずる慎ざる後々々三個の  
師徒妖怪腹中小ある小行者小知るべき便あり小行者も亦尋ふ

あづくる。爰して金瓶呪して師の所在と知る大い。第三十五回  
猛省庵中分嶺の段佛法と假冒して善齋庵と喫し布施と求む  
僧徒の破滅あり中分寺の辨才菩薩の件菩薩の諸人と思  
馳する徒弟の出身と軍て完弊して放ち行いむ。若是善根淺  
薄障深ければ掛礙してふるまふ能其時我を怪しむるありといひ  
し金言ひて今上小仁君慈親ありといへども其身の不省より家と夫  
身と亡しゆめち此挂礙関と越るゝあ來ざる者多し寺後寺前同  
一寺関を関有總非関の句妙あるゝる第三十六回蓮花村の  
件食と思ふて食と泊衣と思ふて衣と泊る人心如意満足あるべ

外求めむるゝの有まゝにこれども人々奇と好む人の常態あるが西域  
佛境小近き所を却て従東寺の真報和尚ありて又此教法小  
従ふ者多し常と捨て奇と好むが文ありは回猪一戒の食と食を  
為小呪死せしれ沙弥の真報小唐突しゆ故小呪死せしる真報の  
惡意憎むべしといへども實小和尚の道吾道従東 胡為西奔  
作之受之 故曰自取のいひあて俗小なる障らぬ神小崇りありの理  
ニ従ふも自ら取所なきふあは祖しは一件ハ三十七回の仕込めて先  
の回眼目ありへし三十七回唐長老真報和尚問答の件孫履眞の  
毛と吹て華と物しゆる真報和尚欣然とて是小居て辞せざる

世小うふ恥と不知徒多し一森羅殿の十王の死の數と論ぶる  
皆々理あり冥報と論ぶ負て自ら死むる死小至ると違つて  
悟らば世小強性の人かる者多し一第三十八回通聖河小至る件地  
水火風と以て心意と明悟さす一本編自ら解説あれば一と許さる  
小及ばず第三十九回玉眞觀より雷音寺小至る件寺中更小  
一人あり本來の空と示せし大なり一山行者の變身して師徒と論  
す一所前記の魔王偲も雷音寺と設て三藏師徒と授意しと  
返對ありは山行者の變身せしと前記の魔王も佛祖と偲冒さる  
幸ハ一ツなれども意ハ異あり叔笑和尚あつて師徒と誘引

真解と云ふゆゑ前記と事々轍とある大なり一第四十回結局  
團圓の件石空僧あり又烏漆禪師あり然りとそ偲めて流  
と分けざるも亦り故物ト立す正あれば邪あり月小盈缺有る如く邪氣  
といふも悉くハ掃除しごとし一頼雲和尚小木棒と授けて法と  
傳えたるも大なり一是といふも解と求る事業艸創の場也へ唐長  
老の正大智識と三徒弟の神通と以て成體したれども以上六守  
成の場也へ慈悲念の篤實懺厚の頼雲小授とたる最そ  
任小堪とる一斬大なり

叔此書の次第と云ふに最初小佛法の興隆花露奢侈ある却て

佛道の大厄あると説き儒者の韓退之の佛骨と説てより大願師  
と引けり佛法真解の基とありける但し生有と大願と立並び  
所めてハ未と真解と引ければ勝劣ハ分けなく一天花寺に至るに  
及んで佛道の閑寂と富麗とと論し木棒の一喝して狂狷禪と  
伏し夫より猪一戒と引出す佛法の富麗ハ直正ハある所  
證授ハ佛田の墜定自利和尚の浮雲の言とあり佛田墜定の  
平坦の処より急ハ缺陷と出して平坦もこの心危くする戒と示し  
是ハ山路の凹凸と説て次ハ流沙の渺々たる大河の底より  
移る大河と渡り越へゆても三十六坑七十二塹の艱難と出

山河數多の崎嶇險阻といひて次ハ五莊觀の清淨の地  
と説く前後目前の更りある退屈ありて大い鬼国の  
黑暗たる所より絃歌村の德行平易と説き文明大王の先王の  
賢聖の道と論ぶる堅き所より生香村の和らみハ移る芳香  
の次ハ惡山の毒臭とつけける惡といふより上善國と出次ハ  
善惡皆陰陽の正不正の事と受るより起るといふより陰陽  
山と出し二系平方の場ハ至つて造化の小児ハ天公と出て造  
化有つて七情生ぶるふらつて六欲三屍と出し不老婆くの遊戯  
と演ぶる序次絲と引け如く最妙ハ又書中ハ一の眼目ハ文明

大王の議論と不老婆々の遊戯冥報和尚の佛道の問答あり  
又河圖の馬へまゝて烏雛の馬へ客あり、禹王の神珍鐵棒  
まゝて女媧の練石白玉舞へ客あり、沙和尚の金像の流沙河  
底と照とと海龍王の金肺玉を以て、孽子海の蜃怪と照とと相  
照應せり、最初小生有和尚あり、最後小冥報和尚あり、是亦相  
照應せり、此書勸懲の理と暗小含みて、教戒小宜しく、續西  
遊水滸後傳西洋記等の上ふ出る、松小見名三つ、拙評ハ斯の  
ど、識者の訂正と俟のこ

天保四癸巳仲殊

黙老識

八月七日起筆 同十日卒業

此評天保四癸巳仲殊七日起草同十日卒業今茲仲夏

之初再閲之最不佳因披於几上以芟繁補闕以淨書焉





